令和６年度　甲賀市紫香楽宮フォーラム

紫香楽宮と聖武天皇

資料集

令和７年２月８日（土）　あいこうか市民ホール

主催：甲賀市教育委員会

令和６年度　甲賀市紫香楽宮フォーラム

「紫香楽宮と聖武天皇」

日　　程

開催日　令和７年（2025年）２月８日（土）
会　場　甲賀市あいこうか市民ホール

12：30　開場・受付開始

13：00～　主催者挨拶

13：10～14：10　報告　「平城京左京三条一坊二坪の調査成果について」
小田　裕樹　氏（国立文化財機構　奈良文化財研究所）

14：10～14：30　休憩

14：30～16：00　講演　「聖武天皇と紫香楽宮～大仏造立にかけた夢～」
瀧浪　貞子　氏（京都女子大学名誉教授）

目　　次

報告　平城京左京三条一坊二坪の調査成果について　・・・・・・・・・・・1
小田　裕樹　氏（国立文化財機構　奈良文化財研究所）

講演　聖武天皇と紫香楽宮～大仏造立にかけた夢～　・・・・・・・・・・・9
瀧浪　貞子　氏（京都女子大学名誉教授）

平城京左京三条一坊二坪の調査成果について

奈良文化財研究所
小田　裕樹

はじめに

・聖武天皇（701－756）と平城京について。
・2024年の発掘調査（平城京左京三条一坊二坪の調査）で新たな発見。
　・・・聖武即位の際の「大嘗祭（だいじょうさい）」関連木簡が出土。
※大嘗祭とは天皇が即位して初めての新嘗祭（その年に初めて収穫された穀物などを神に感謝して供え、天皇自らも食する儀式）のこと。
・発掘調査の成果とともに、聖武天皇が即位した724（神亀元）年前後の平城宮・京について紹介したい。

1．奈良の都・平城京～平城京・平城宮とはどのような場所か？

（1）平城京とは（図1）

・710（和銅３）年に藤原京から遷都。
・朱雀大路を挟んで左京と右京に分かれる。
・大路に囲まれたブロックを16坪に分割する。

（2）平城宮とは（図2）

・平城京の北端に平城宮が位置する。朱雀大路に面する正門が朱雀門。
・平城宮は約1km四方の方形プランの東辺に張り出し部をもつ。
　→東張り出し部（東院地区）には首皇子の「東宮」がおかれた。
・二つの中枢区画。
中央区：朱雀門に続く中軸線上。（第一次）大極殿－朝堂院。
　→即位や元日朝賀などの国家的儀式がおこなわれた。
東区：内裏－大安殿－朝堂院－朝集院。
　→東区朝堂院は政務の場。朝庭（広場）で聖武大嘗祭がおこなわれた。

2．平城京左京三条一坊二坪の発掘調査～何が明らかになったのか？

（1）左京三条一坊二坪周辺の調査（図3・4）

これまでの研究により、官衙（役所）の可能性が高いと考えられていた。
　→「大学寮」説。大学寮は役人養成機関。平安京での大学寮の位置から。

①左京三条一坊一坪の様相

朱雀門の南東の坪。築地塀で囲まれていない広場だった。
・奈良時代初頭・・・鍛冶工房関連施設が展開。平城宮の造営に関わる？
　→鍛冶工房の廃絶後、朱雀門前の広場として利用。
・坪内に東西の坪内道路があり、周辺に井戸・掘立柱建物群が展開する。

②左京三条一坊八坪の様相

奈良時代の遺構はほとんど確認されていない。

③左京三条一坊七坪の様相
　奈良時代後半の掘立柱建物群を検出（奈文研 1993）。
　須恵器大甕や「大」・「厨」などの墨書土器が出土した。
④左京三条一坊二坪の様相
　坪の西辺・北辺に築地塀が巡っていたことが判明。
　中心部の調査はほとんどおこなわれていなかった。
⇒2023 年度に二坪の北半中央部を調査した（平城第 658 次調査）。

（2）左京三条一坊二坪の調査成果（図5）
大きく３段階の遺構変遷を確認した。
Ⅰ期　掘立柱建物群の造営
　平城京造営時の整地後、複数の掘立柱建物（建物１～５）が建てられた。
　建物群は南側の柱筋をほぼ揃えており、計画的に配置・造営された。
　建物群の南に空閑地。掘立柱塀（南北塀・東西塀）で区画していた。
Ⅱ期　「大土坑」の掘削と埋め戻し（723～724 年前後）
　聖武大嘗祭関連木簡が出土した大土坑の時期。
　Ⅰ期の建物群よりも後に掘削・埋め戻しがおこなわれた。
Ⅲ期　礎石建物の造営
　礎石を捨て込んだ土坑（土坑群１～３）を検出。
　　・・・３棟程度の礎石建物の存在が想定される。
⇒簡易な掘立柱建物群（Ⅰ期）→礎石建物群（Ⅲ期）に空間利用が変化した。
　その間に「大土坑」の時期（Ⅱ期）があった。

（3）聖武大嘗祭関連木簡の発掘（図6～9）
①大土坑
・調査区東部で検出。東西 2.8m×南北 2.5m、平面ほぼ方形。深さ 1.0m。
・上層は砂質土と粘質土が交互に堆積。
・下層は木簡や木製品等を大量に含む有機質層。
　→大量の木簡・木製品を短期間で廃棄したのち（下層）、地盤沈下対策をしながら埋め戻す（上層）。
②出土木簡
・「大嘗分」「大嘗贄」「神亀元年」
　→724（神亀元）年の大嘗祭に関わる木簡。＝聖武天皇の大嘗祭。
・「海藻」「堅魚」「烏賊」「栗」「梨」「糸」「荒炭」「苫」・・・
　→荷札木簡と付札。大嘗祭で使う物品が集積、仕分けの場？
・備中国の郡名が書かれた木簡
　→備中国からの荷札木簡が多数。９郡全てが揃う。
　　・・・聖武大嘗祭の物品貢納に備中国が深く関わる。なぜ備中なのか？
③木簡以外の出土遺物
・土器・木製品・草本類

（4）小　結

・左京三条一坊二坪の土地利用の変遷が明らかになった。
・聖武天皇即位の大嘗祭に関わる物品が廃棄されていた。
　→大嘗祭の準備・物品調達の実態解明の手掛かりを得た。
課題：なぜ、この場所に廃棄されたのか？「大学寮」説との関わりは？

3. 聖武天皇の即位と平城宮・京　～聖武天皇の即位前と即位後

（1）首皇子と「東宮」（図 12）

・即位前の首皇子は藤原不比等邸で養育？
　→藤原不比等邸は平城宮の東に接する。法華寺下層。
・714（和銅７）年に皇太子となる。東院地区の「東宮」へ。
　→東院１期遺構群。大型建物など複数の区画。庭園も付設。
　　・・・平城宮東院地区は首皇子のために整備された？

（2）聖武大嘗宮（図 10・11）

・大嘗宮：大嘗祭をおこなった儀礼施設。
　→平城宮東区朝堂院で奈良時代天皇の大嘗宮遺構が見つかっている。
・聖武の大嘗宮遺構は、悠紀殿と膳屋・臼屋を確認している。
・左京三条一坊二坪に納入、仕分けられた物品も大嘗宮に持ち込まれた。

（3）聖武即位後の平城宮（図 13・14）

・大極殿院・内裏の増築・改変をおこなう。
　→天皇の権威を高めるために平城宮内の改造をおこなった。

4. おわりに

参考文献

奈良文化財研究所（編）2010『図説　平城京事典』柊風舎
奈良文化財研究所 1993『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』
奈良文化財研究所 2024a『平城京左京三条一坊一・二・八坪発掘調査報告』
奈良文化財研究所研 2024b 『平城京左京三条一坊二坪の発掘調査（平城第 658 次調査）記者発表資料』(https://sitereports.nabunken.go.jp/138315)
奈良文化財研究所 2024c 『平城京左京三条一坊二坪の発掘調査（平城第 658 次調査）出土木簡について　記者発表資料』(https://sitereports.nabunken.go.jp/138674)
奈良文化財研究所 2024d『聖武天皇が即位したとき。』（平城宮跡資料館図録）
渡辺晃宏 2020『日本古代国家建設の舞台　平城宮』新泉社
※出典の記載がない写真・図面は奈良文化財研究所提供

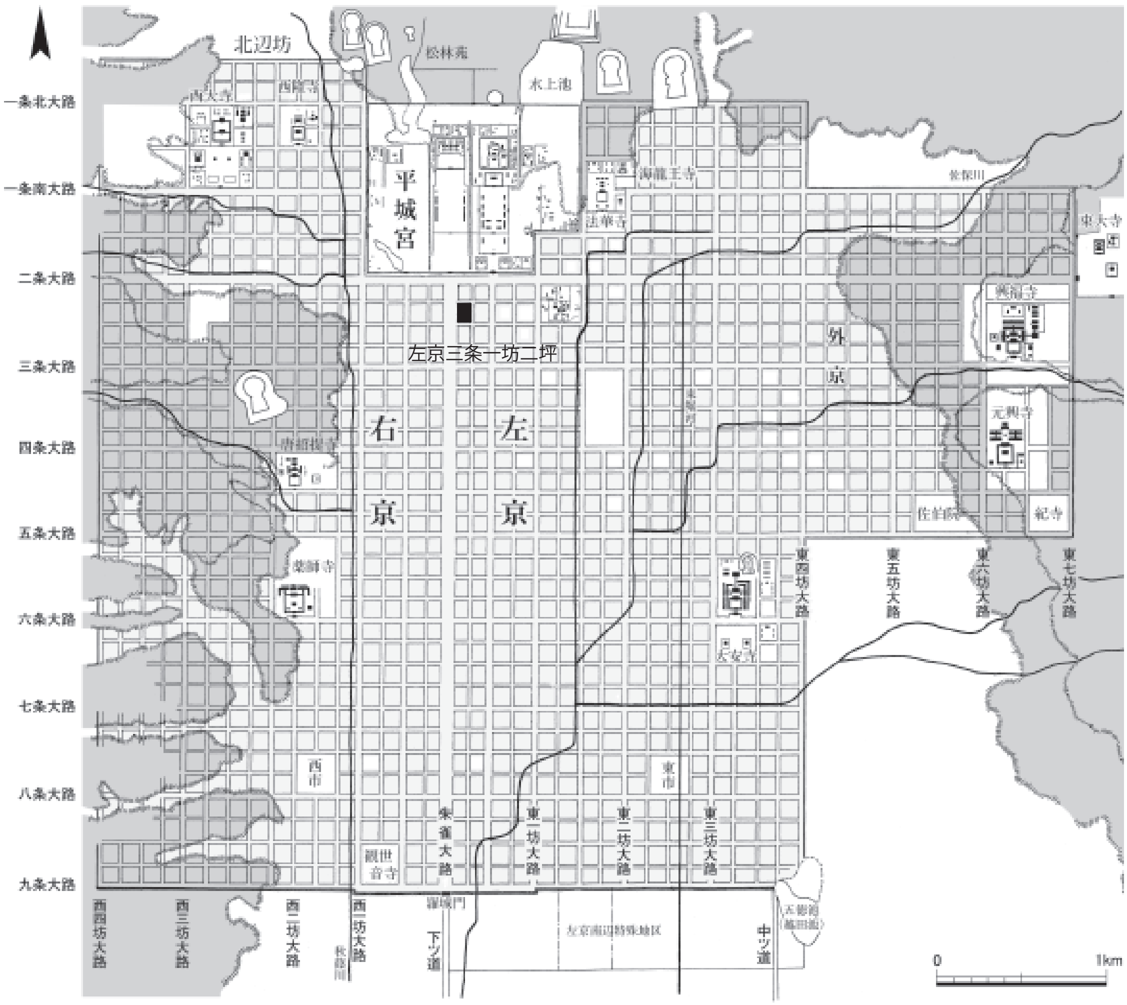


図１　平城京条坊図

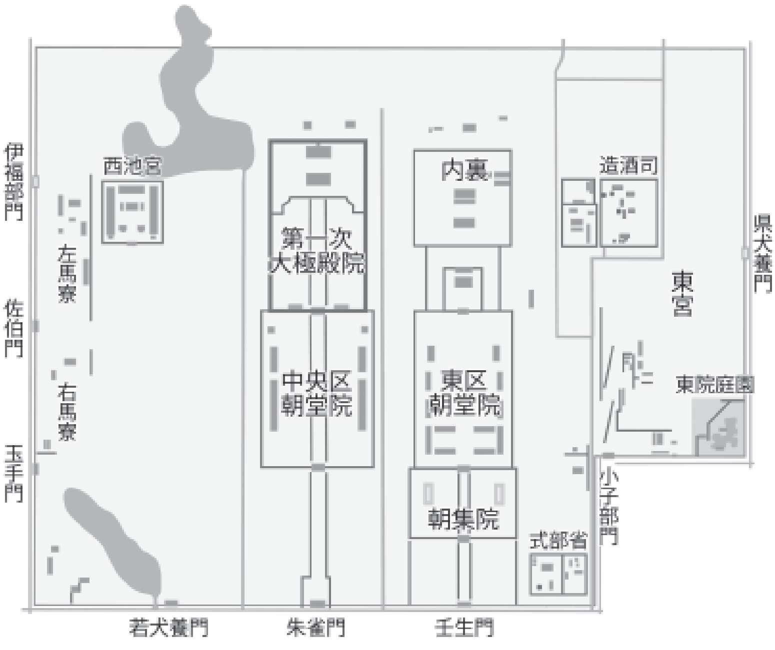


図２　奈良時代前半の平城宮（渡辺 2020）

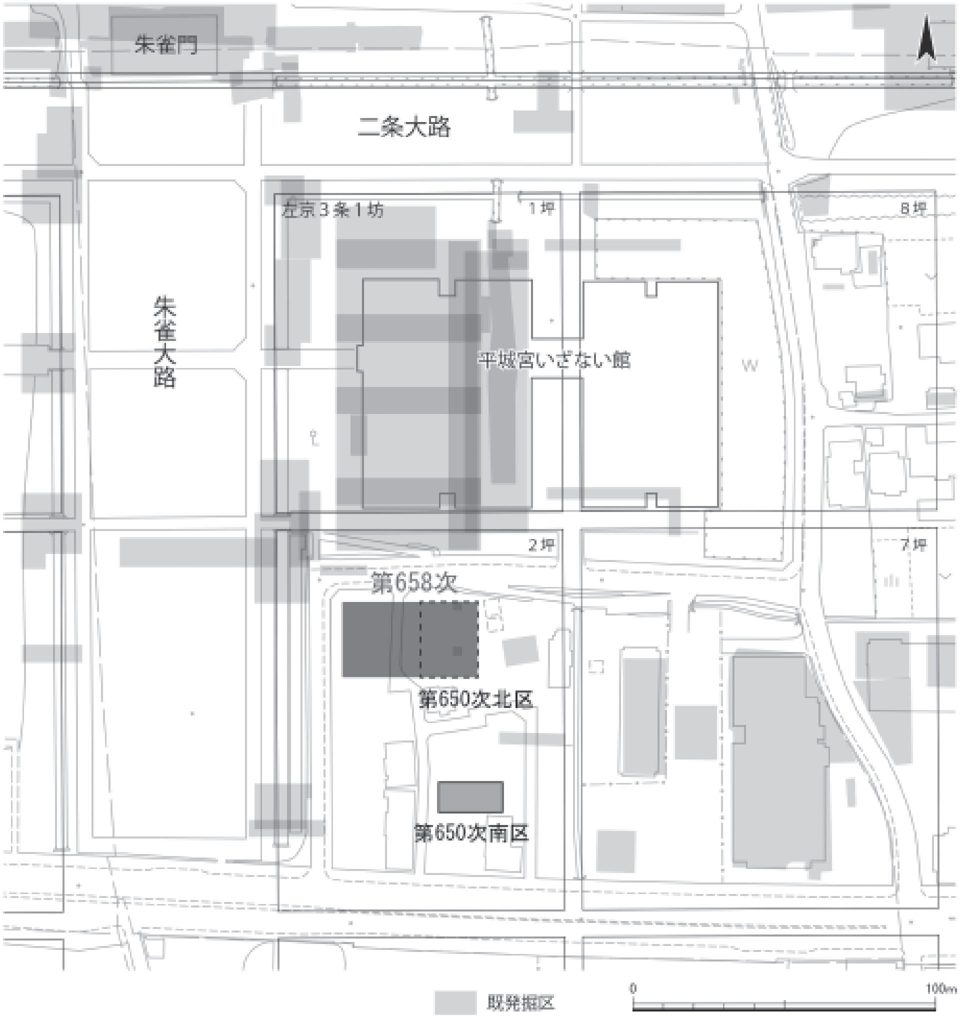


図３　平城京左京三条一坊二坪付近の調査位置図

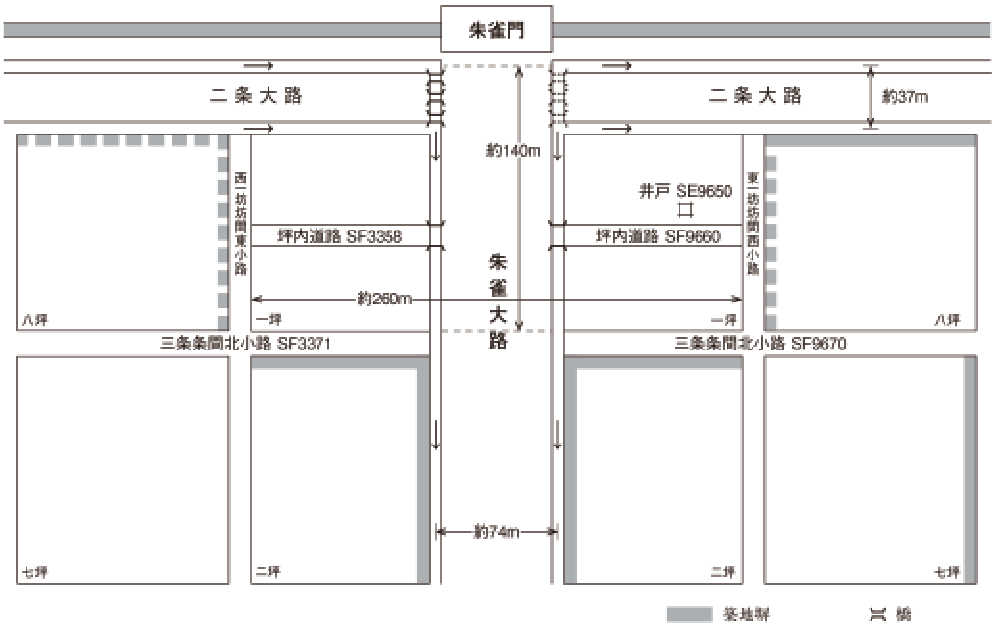


図４　朱雀門前広場の復元模式図（奈文研 2024a）

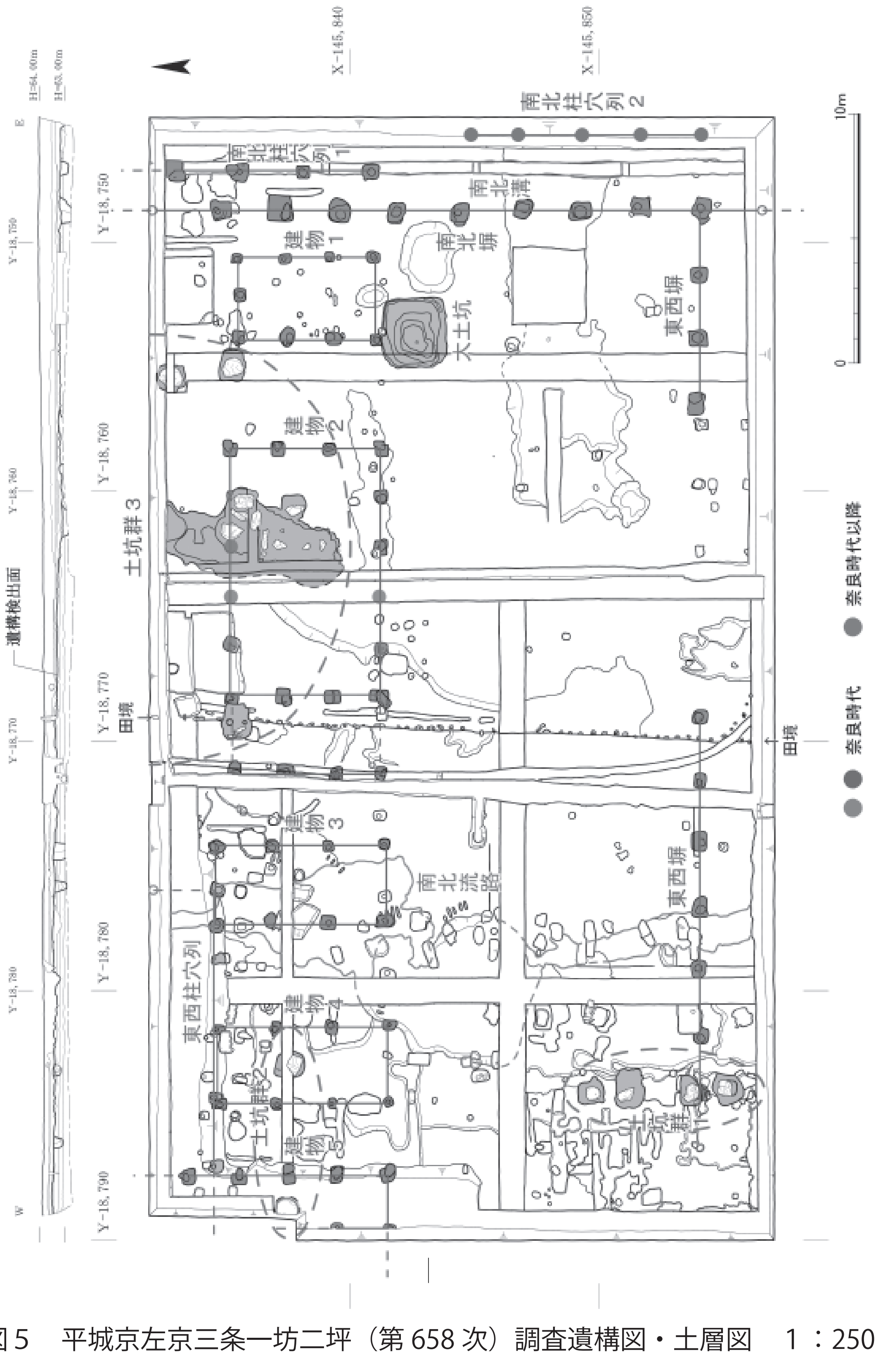


図 5　平城京左京三条一坊二坪（第 658 次）調査遺構図・土層図　1 ：250

図６　大土坑の調査状況

図７　大土坑出土土器

図８　木簡の取り上げ作業

1
・哲多郡進出大嘗分荒炭一斛
・十月十六日　石

2
・郡村社郷高負里大嘗分
・色人

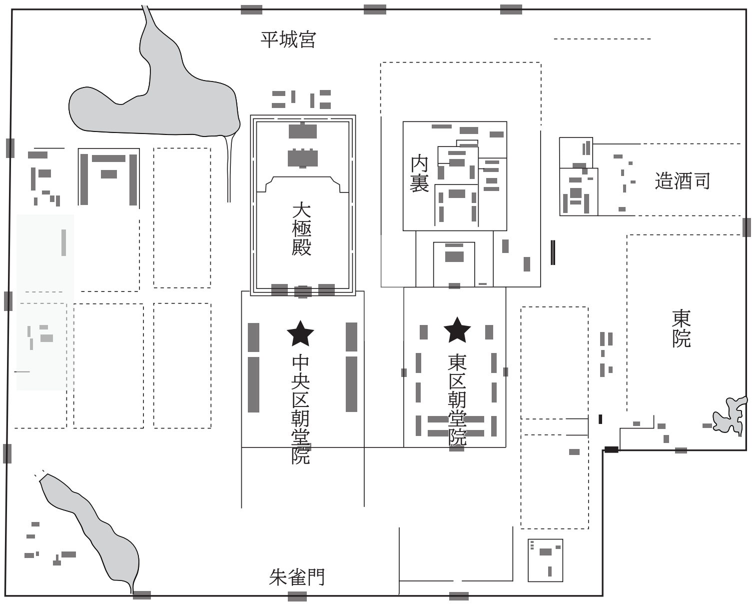
3
・刑部郷三洛里大嘗分
・苫一枚

4
佐□〔波ヵ〕郡大嘗贄押年魚□〔千ヵ〕百十隻

5
・五連和五百嶋
・神亀元年八月廿二日

5　4　3　2　1

図９　大土坑出土木簡（赤外線画像）と釈文



大嘗祭の年月日	天皇	悠紀国	主基国	大嘗宮推定地
霊亀2年(716)11月19日	元正	遠江	但馬	東区朝堂院朝庭
神亀元年(724)11月23日	聖武	備前	播磨	東区朝堂院朝庭
天平勝宝元年(749)11月25日	孝謙	因幡	美濃	(平城宮外)
天平宝字2年(758)11月23日	淳仁	丹波	播磨	東区朝堂院朝庭
天平神護元年(765)11月22日ヵ	称徳	美濃	越前	中央区朝堂院朝庭
宝亀2年(771)11月21日	光仁	参河	因幡	東区朝堂院朝庭
天応元年(781)11月13日	桓武	越前	備前	東区朝堂院朝庭

図 10　奈良時代に即位した天皇の大嘗宮推定地

（奈文研 2024d）

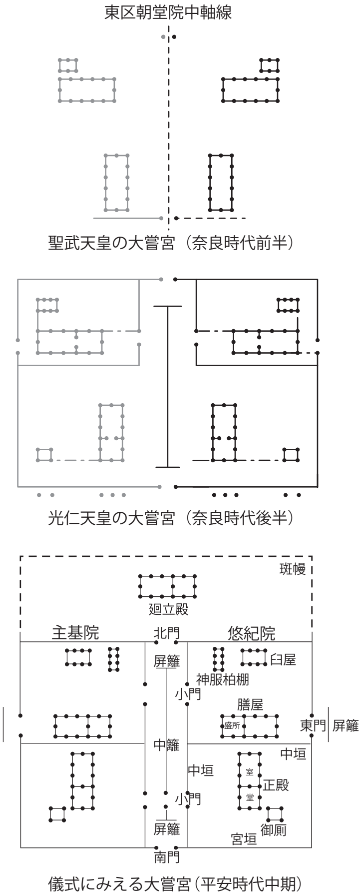


図 11　大嘗宮の変遷

（奈文研 2024d）

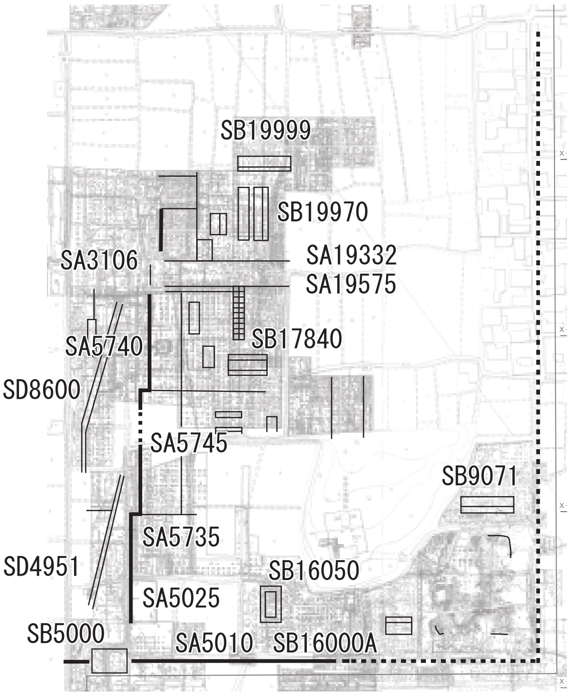


図 12　首皇子の時期の東院地区（奈文研 2024d）

図 13　平城宮内裏出土の軒瓦

図 14　第一次大極殿院西楼

出土の 隅木蓋瓦

聖武天皇と紫香楽宮
～大仏造立にかけた夢～

令和七年二月八日　瀧浪貞子

（1）宮子との対面（『続日本紀』天平九年（七三七年）十二月二十七日条）
この日、皇太夫人藤原氏（宮子）、皇后宮に就きて僧正玄昉法師を見る。天皇（聖武）もまた皇后宮に幸したまう。皇太夫人、幽憂に沈み久しく人事を廃するがために、天皇を誕れましてより、かつて相見えず。法師ひとたび看て慧然として開晤す。ここに至りて、たまたま天皇と相見えたり。

（2）諱（首）の初見（『本朝皇胤紹運録』）
聖武天皇・・・諱（実名）は首なり。

（3）藤原行成の日記『権記』（長保三年（一〇〇一）五月二十四日条）
天平大聖武皇帝、諱は前史（続日本紀）に欠きて、これを記さず。この夜また夢を見るに、皇帝の御日記ならびに往来の書草（手紙の下書き）に、諱は首の字なり。夢中に人ありて曰く、首の字の訓は悪なり、と。余（行成）曰く、首の字の訓は善なり、と。この他見るところ甚だ種々なり。然りてつまびらかには覚えず。よって記さず。

（4）慈円の『愚管抄』（巻一）
諱は分明ならず・・・。

（5）聖武天皇の諡（『続日本紀』天平勝宝八年〈七五六年〉）
太上天皇、出家して仏に帰したまう。更に諡を奉らず。

（6）勝宝感神聖武皇帝（『同　右』天平宝字二年〈七五八年〉八月九日条）
（孝謙）勅して曰わく、・・・追って尊号を上り、策して勝宝感神聖武皇帝と称し、諡して天璽国押開豊桜彦尊と称す。・・・

（7）改字（『同　右』天平九年（七三七年）十二月二十七日条）
大倭国を改めて、大養徳国とす。

（8）聖武の帝王意識
①天地の災異が続くため、三〇〇〇人の出家と七日間の読経によって攘災招福を願った中でのこと
仰ぎ災禍を思い見るに、責め深きこと予（聖武）にあり。・・・
（『続日本紀』神亀二年〈七二五年〉九月二十二日条）
②婦女の衣服を「新様」に改めることを命じ、風俗を整えることが重要だと述べた詔中でのこと
安不の事、予一人にあり（世間が安心か、安心でないかはすべて自分一人の責任である）
（『同　右』天平二年〈七三〇年〉四月十六日条）
③天平六年（七三四年）四月の大地震、また同六年～九年にかけての深刻な飢饉
責めは予一人にあり。兆庶に関かるに非ず。
（『同　右』天平六年〈七三四年〉四月二十一日条）
④天平七年〈七三五年〉～同九年にかけての疫病の流行
まことに朕が不徳によりて、この災殃を致せり。天を仰ぎて慙ち恐れ、あえて寧く処らず。
（『同　右』天平九年〈七三七年〉八月十三日条）

（9）国分寺建立の詔（『続日本紀』同十三年（七四一）二月十四日条）
（前略）天下の諸国をして各七重塔一区を敬い造らしめ、併せて金光明最勝王経・妙法蓮華経各一部を写さしむべし。・・・その造塔の寺は、兼ねて国華とせむ。必ず好き処を択びて、実に久しかるべし。人に近くは、薫臭の及ぶ所を欲せず。人に遠くは、衆をわずらはして帰集することを欲せず。国司等、各務めて厳飾をたもち、兼ねて潔清を尽くすべし。・・・また

(10) 大仏造立の詔（『続日本紀』天平十五年〈七四三年〉十月十五日条）

詔して曰わく、・・・ここに天平十五年歳癸未に次る十月十五日をもって菩薩の大願を発して、盧舎那仏の金銅像一軀を造り奉る。国の銅を尽くして象を鋳、大山を削りて堂を構え、広く法界に及ぼして、朕が智識とす。遂に同じく利益を蒙りて共に菩提を致さしめむ。それ、天下の富みを有つは朕なり。天下の勢いを有つは朕なり。この富みと勢いとをもって、この尊き像を造らむ。事成り易く、心至り難し。・・・この故に智識に預かる者は、懇ろに至れる誠を発し、各おおきなる福を招きて、日ごとに三たび盧舎那仏を拝すべし。自ら念を存して各盧舎那仏を造るべし。もし更に人有りて一枝の草、一把の土を持ちて像を助け造らむと情願はば、恣に聴せ。・・

(11) 大仏の発願（『同　右』天平勝宝元年〈七四九年〉十二月二十七日条）

八幡大神の祢宜尼大神朝臣杜女（その輿は紫色なり。もっぱら乗輿に同じ）、東大寺を拝す。天皇（孝謙）・太上天皇（聖武）・太后（光明子）も同じくまた行幸したまふ。この日、百官と諸氏の人らとことごとく寺に集う。僧五千を請じて礼仏読経せしむ。大唐・渤海・呉の楽、五節田舞、久米舞をなさしむ。よりて大神に一品を奉る。比咩神には二品。左大臣橘宿禰諸兄、詔をうけたまわりて神に申して曰く、「・・去る辰の年（天平十二年）河内国大県郡の知識寺に坐す盧舎那仏を礼拝したてまつりて、すなわち朕も造りまつらむと思へども、え為さざりし間に、豊前国宇佐郡に坐す広幡の八幡大神に申し賜へ、勅りたまはく、『神我天神・地祇を率いいざなひて、必ず成しまつらむ。事立つに有らず。銅の湯を水と成し、わが身を草木土に交えて障ること無くなさむ。・・』」とのたまふ。尼杜女に従四位下を授く。主神大神朝臣田麻呂に外従五位下。東大寺に封四千戸、奴百人、婢百人を施す。

(12) 関東行幸（『同　右』天平十二年〈七四〇〉十月二十六日条）

大将軍大野朝臣東人らに勅して曰く、「朕（聖武）おもふ所有るによりて、今月の末、しばらく関東に往かむ。その時に非ずと雖も、事やむこと能わず。将軍これを知るとも、驚き怪しむべからず」とのたまふ。壬午（二十九日）、伊勢国に行幸したまふ。

(13) 恭仁京の造営（『同　右』同年十二月六日条）

不破より発して坂田郡横川の頓宮に至る。この日、右大臣橘宿禰諸兄、前に在りて発して山背国相楽郡恭仁郷を経略す。遷都に擬するをもっての故なり。

(14) 大養徳恭仁京（『同　右』同十三年（七四一）十一月二十一日条）

右大臣橘宿禰諸兄奏す、「この間の朝廷、何の名号をもってか万代に伝へむ」と。（聖武）天皇勅して曰く、「号して大養徳恭仁の大宮とせん」とのたまふ。

(15) 紫香楽宮の造営（『同　右』同十五年〈七四三〉十月十九日条）

初めて平城の大極殿ならびに歩廊を壊して、恭仁宮に遷し造ること、ここに四年にして、その功わずかに畢る。用度の費やす所あげて計ふべからず。ここに至りて更に紫香楽宮を造る。よって恭仁宮の造作を停む。

(16) 行基（『同　右』同年十月十九日条）

皇帝（聖武天皇）、紫香楽宮に御す。盧舎那仏の像を造り奉らんが為に、始めて寺地を開く。ここにおいて行基法師、弟子等を率いて衆庶を勧誘す。

(17) 宇佐八幡宮の知識（『東大寺要録』巻四）

吾（宇佐八幡神）、国家を護ること、この楯戈のごとし。神祇を唱え率いて、ともに知識と為らん。

(18) 治道の失（『同　右』天平十七年（七四五年）九月十七日条）

朕、この頃枕席安からず。ようやく旬日に延ぐ。おもんみるに、治道失有りて、民多く罪に罹るにあら

む。天下に大赦すべし。常赦の免ぜざる所もことごとく赦除せよ。

(19) 八幡神への奉賽（『続日本紀』天平十三年閏三月二十四日条）
八幡神宮に秘錦冠一頭、金字の最勝王経・法華経各一部、度者十人、封戸、馬五匹を奉る。また三重塔一区を造らしむ。

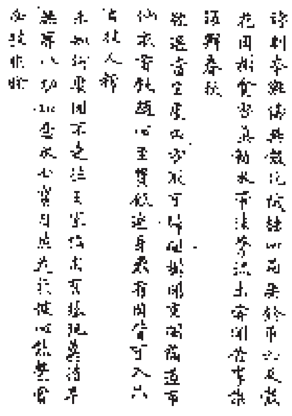
(20) 知識（『東大寺要録』）

材木知識	五万千五百九十人
役夫	百六十六万五千七十一人
金知識	三十七万二千七十五人
役夫	五十一万四千九百二人

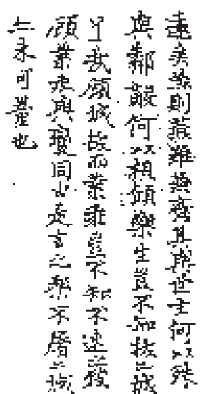
(21) 大仏開眼（『続日本紀』天平勝宝四年〈七五二年〉四月九日条）
盧舎那大仏の像成りて、始めて開眼す。この日、東大寺に行幸したまふ。天皇（孝謙女帝）、みずから文武の百官を率いて、設斎大会したまふ。その儀、もっぱら元日に同じ。五位以上は礼服を着る。六位以下は当色。僧一万を請ふ。すでにして雅楽寮と諸寺との種々の音楽、ならびにことごとく着たり集まる。また、王臣諸氏の五節・久米舞・楯伏・踏歌・袍袴などの歌舞あり。東西より声を発し、庭を分けて奏す。作すことの奇しく偉きこと、あげて記すべからず。仏法東に帰りてより、斎会の儀、かつてかくの如く盛んなるは有らず。・・・

(22) 藤原皇后の、天皇に奉れる御歌一首（『万葉集』巻九－一六五八）
わが背子と　二人見ませば　いくばくか　この降る雪の　嬉しからまし

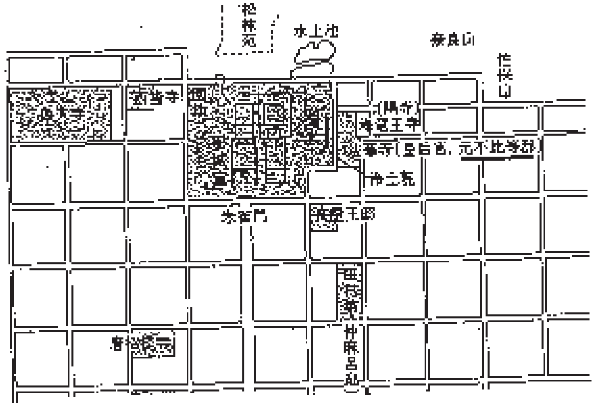
(23) 聖武天皇筆「雑集」



(24) 光明皇后筆「楽毅論」



(25) 平城宮略図



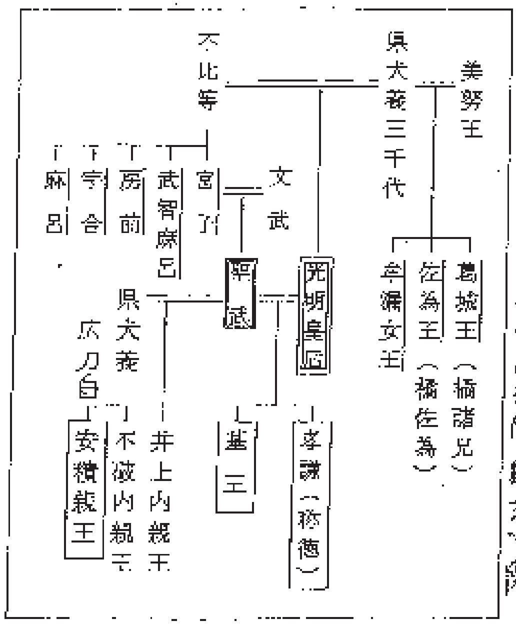
光明子・聖武略年譜

	光明子（安宿媛）		聖武（首皇子）	社会状勢
701年（大宝1）	1歳	誕生	誕生	
710年	10歳			3月 平城京遷都
714年	14歳		6月 立太子	
716年	16歳	5月 皇太子妃		
718年	18歳	阿倍内親王出産（孝謙天皇）		
720年	20歳			8月 藤原不比等没
724年	24歳		2月 即位	
726年	26歳		7月 東金堂建立	
727年	27歳	9月 基王出産		11月基王立太子
728年	28歳			9月 基王没 この年安積親王誕生
729年	29歳	8月 立后		2月 長屋王の変
730年	30歳	4月 五重塔を建立		
733年	33歳			1月 橘三千代没
734年	34歳	1月 興福寺西金堂を建立		
737年	37歳		12月 宮子と対面	4月 房前没 7月 麻呂・武智麻呂没 8月 宇合没
738年	38歳			1月 阿倍内親王立太子
740年	40歳			9月 藤原広嗣乱、東国行幸
743年	43歳			10月 大仏造立の詔
744年	44歳			閏1月 安積親王没
745年	45歳			5月 平城京遷都
747年	47歳	新薬師寺建立		
749年	49歳	7月 皇太后	7月譲位	7月 孝謙即位
752年	52歳		4月大仏開眼	
756年	56歳		5月聖武没	
757年	57歳			7月 橘奈良麻呂の乱
760年	60歳	6月 光明子没		

28

26

聖武天皇・光明皇后略系図



27

疱瘡流行年

流行した年	間隔
天平8年（736）	
	54年
延暦9年（790）	
	24年
弘仁5年（814）	
	39年
仁寿3年（853）	
	26年
元慶3年（879）	
	36年
延喜15年（915）	
	32年
天暦1年（947）	
	27年
天延2年（974）	

① 幼なじみ
② 知識
③ 東国行幸
④ 神と仏

4

31

元明天皇の甕原行幸

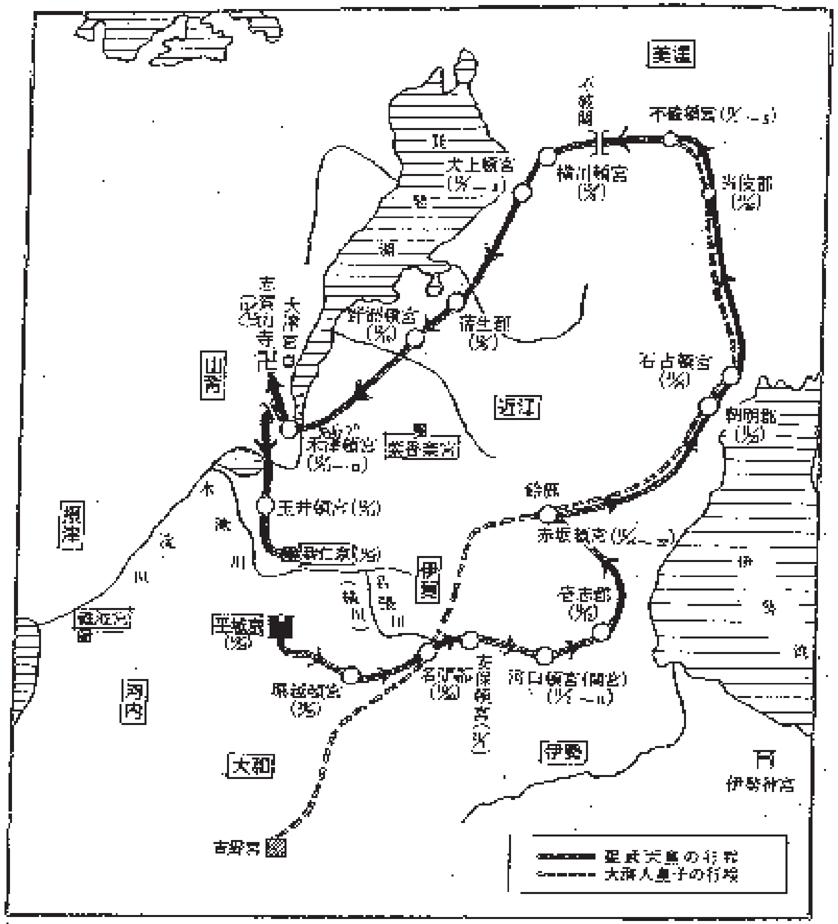
和銅6年	(713年)	6・23	甕原離宮に行幸
7	(714年)	閏2・27	〃
霊亀1	(715年)	3・1	〃
		7・10	〃

32

紫香楽宮関係年表（①～⑤は行幸の回数）

天平14年(742)	2月5日	恭仁京東北道を開き、近江国甲賀郡に通ず
	8月27日	①紫香楽宮行幸（～9月4日）
	12月29日	②紫香楽宮行幸（～翌15年1月2日）
天平15年(743)	4月3日	③紫香楽宮行幸（～4月16日）
	5月27日	墾田永年私財法の発布
	7月26日	④紫香楽宮行幸（～11月2日）
	10月15日	紫香楽宮にて大仏造立の詔
	10月16日	25ヵ国の調庸物を紫香楽宮に貢納させる
	10月19日	紫香楽宮に寺地を開く。行基、弟子等を率いて衆庶を勧誘
	12月26日	恭仁京の造営停止
天平16年(744)	閏1月1日	百官に定都を問う 恭仁京に賛成　五位以上24人 六位以下157人　計181人 難波京に賛成　五位以上23人 六位以下130人　計153人
	閏1月4日	京人に定京を問う。皆恭仁京を願う。難波1人、平城1人
	閏1月11日	難波宮行幸
	閏1月13日	安積親王没
	2月1日	恭仁京より駅鈴、内外印を難波宮に運ばせる
	2月20日	恭仁京より高御座、大楯を難波宮に運ばせる
	2月24日	⑤紫香楽宮行幸
	2月26日	勅を発し、難波宮を皇都となす
	4月13日	紫香楽宮西北山に火事
	11月13日	甲賀寺に大仏の骨柱を立てる。元正も難波から参列
天平17年(745)	1月21日	行基法師を大僧正となす
	4月1日	市の西山に火事
	4月3日	寺の東山に火事
	4月11日	紫香楽宮東山に火事。連日消えず
	5月2日	官人に定都を問う。皆平城と答える
	5月3日	恭仁宮を掃除させる
	5月4日	四大寺の衆僧に定都を問う。皆平城と答える
	5月6日	恭仁京に還幸
	5月9日	紫香楽宮山火事
	5月11日	平城宮に還御
	12月15日	恭仁宮の兵器を平城に運ぶ
天平18年(746)	9月29日	恭仁宮の大極殿を山背国分寺に施入

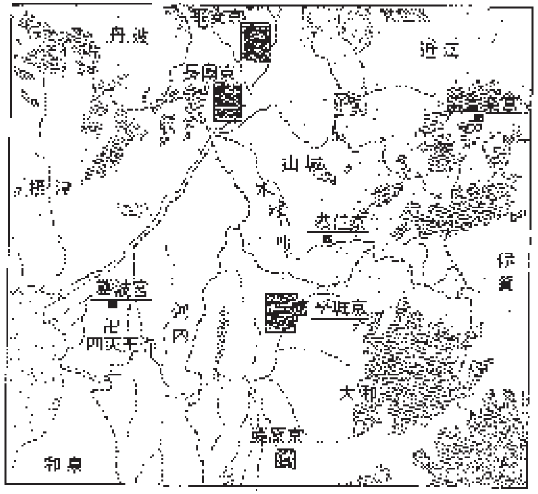
29



大海人皇子と聖武天皇の東国行幸行程図

（　）内の数字は聖武天皇が当該地に到着もしくは宿泊した月日

30



古代の宮都図

5

33

神祇と仏教

神祇	年月日	理由	仏教
	神亀2(725)閏1.17	災異を除く	大般若経読経
	神亀2(725)9.22	災異を除く	災異が続くため3000人を出家 7日間の読経
	神亀3(726)6.21	元正上皇の病	30人を出家
	神亀3(726)7.19	元正上皇の病	22人を出家
奉幣	神亀3(726)7.20	元正上皇の病	
設斎	神亀3(726)8.8	元正上皇の病	写経
	神亀4(725)2.18		災異を読経
大祓	神亀5(726)8.21	皇太子の病	造仏・写経
奉幣	神亀5(726)8.23	皇太子の病	
奉幣	天平2(730)閏6.17	落雷	
奉幣	天平4(732)7.5	日照り	読経
	天平2(730) ↕ 天平5(733)	日照り 大風 飢饉	
	天平6(734)	地震	
	天平7(735)5.24	災異を除く	四大寺で読経
	天平7(735)8～	病流行	
奉幣	天平7(735)8.12	疫病	読経
	天平8(736)7.14	元正上皇の病	100人を出家 7日間の読経
	天平9(737)4.8		転読
奉幣	天平9(737)4.19	疫病	
神祇を祀るも効果なし	天平9(737)5.1		読経
	天平9(737)8.2	疫病	読経
	天平9(737)8.5		読経
奉幣	天平9(737)8.13	災厄	
	天平9(737)10.19	地震	
	天平9(737)10.26	疫病	金光明最勝王経講義
	天平10(738)4.17		読経
	天平16(744)12.4	災異を除く	諸国の薬師如来に罪過を懺悔する
	天平17(745)5.2	地震	17日間の転読
	天平17(745)5.10	地震	読経
奉幣	天平17(745)5.11	地震	
奉幣	天平17(745)9.19	天皇の病	3800人を出家 畿内諸寺の薬師如来に罪過を懺悔する
奉幣	天平17(745)9.20	天皇の病	写経
	天平17(745)9.23	天皇の病	読経
	天平19(747)5.15	地震	講説

6

令和６年度　甲賀市紫香楽宮フォーラム
「紫香楽宮と聖武天皇」
資料集

令和７年２月８日発行

編集発行　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市水口町水口6053